

## リカードウ『原理』における「再生産」概念

佐藤 滋 正

### (一)

リカードウは、『経済学および課税の原理』<sup>1)</sup>の中で「再生産」という概念をほとんど使用していない。「再生産」という言葉を、さしあたり、当年度の生産システムが次年度にも再び出現してくることとだけ定義しておけば、ケネーやスミスがこの概念を、「生産」「分配」「交換」「消費」とともに多用しているのに対して、リカードウはこの語の使用に非常に慎重である。『原理』(第3版)の全32章中、「再生産」という語は、わずかに12章、17の Paragraph に24語のみ確認されるにすぎない。<sup>2)</sup>

このことは、もちろんリカードウ理論において「再生産」概念が重要性をもたないことを意味するものではない。『原理』「序言」で述べられているように、リカードウ経済学の主題は「分配を規制する諸法則を決定すること」(p.5)、つまりまさに「生産」と「消費」の関連領域(「再生産」)の探究にこそあったはずだからである。とすると、概念としての中軸性にもかかわらずタームとしての使用頻度の低さは、逆に、リカードウにとって「再生産」がいかに厳密に定義されたキー・ワードであったかを物語る

1) 本稿では、D.Ricardo, *On the Principles of Political Economy, and Taxation, The Works and Correspondence of David Ricardo*, edited by Piero Sraffa with the collaboration of M.H.Dobb, Vol. I, Cambridge University Press, 1951 をテキストとして使用する。以下、同書からの引用は(p.×××)のように略記し、本文中に挿入して示すことにする。またA.スミス『国富論』からは、A. Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited by E.Cannan, Charles E. Tuttle Company, 1979 をテキストとして使用し、引用頁は(W.N., p.×××)のように略記する。文中、傍点(⋯)は原著者の、それ以外の強調符(⊙)および[ ]は、すべて筆者のものである。

2) 『原理』初版・第2版で「再生産」という語が第3版と違って使用されているばあいには、その都度注)で触れておいた。

ものとも考えられる。実際すぐ後で見ると、『原理』で「再生産」という語が現れてくるのは、「経済学の原理」部分(第1～7章)では「価値論」と「地代論」、「課税論」部分での6つの章、そして「論争の諸章」部分では第19章、第20章、第31章、第32章という、いずれも従来の『原理』研究でもっとも注目されてきた諸章であり、そのことを考えると、上の推測にも一定の根拠があるようにも思えるのである。

「再生産」という語が登場してくる箇所に注目することによって、『原理』の全体像理解への手がかりを得ることはできないだろうか。本稿は、このような問題意識の下でおこなった調査結果である。もとよりこの種のサーベイには思わぬ見落としも予想される。忌憚のない指摘と批判を賜りたい。

(二)

『原理』(第3版)中の、「再生産 reproduction」「再生産する reproduce」「再生産される reproduced」「再生産的 reproductively」というタームを抽出すれば以下のようなものである。登場するパラグラフの順序に従って、章・頁・概要を、通し番号を付して一覧表示しておく。

	章	頁	概 要
①	ch. 1	p. 31	資本の再生産の速やかさによる固定資本と流動資本への分類
②	〃	p. 38	流動資本はより短時間で消費されその価値が再生産される
③	ch. 2	p. 76	「地代の再生産」概念に関するスミスからの批判的な引用
④	〃	p. 77	スミスの同上の概念に対するビュキャナンからの肯定的な引用
⑤	ch. 8	p.150	食物と衣服の、消費され再生産される速やかさの違い
⑥	〃	p.151	他の価値を再生産する者による一国の生産物の消費
⑦	〃	p.151	一国資本の不生産的支出による再生産の不断の減少
⑧	ch. 9	p.167	負担が平等で再生産が抑圧されなければ課税対象の選択は不要
⑨	ch.13	p.196	年々再生産される商品は供給調節が速やかにおこなわれる
⑩	ch.14	p.201	年々再生産される土地生産物も市場価格の調整は速やか
⑪	ch.15	p.207	資本の再生産が速やかかどうかは価格に異なる影響を及ぼす
⑫	ch.16	p.229	財貨の価値を利潤を伴って再生産する勤勉な人々の雇用の増加
⑬	ch.19	p.270	一国資本が同一の商品構成であれば再生産は同一の比率で進む
⑭	ch.20	p.278	一国の富は貯蓄の再生産への使用によって増加されうる

⑮	ch.20	p.279	収入を再生産的に用いることによる追加的資本の獲得
⑯	ch.31	p.391	製造業者にとって必要なのは充用資本価値と利潤の再生産である
⑰	ch.32	p.429	スミスの「再生産」概念を受容するマルサスからの批判的引用

見られるように『原理』中に確認される「再生産」という語は、「価値論」(①②)、「地代論」(③④)、「課税論」(⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫)、「論争的諸章」(⑬⑭⑮⑯⑰)のように分布している。「課税論」と「論争的諸章」に多く、「経済学の原理」部分の諸パラグラフにはあまり出てこない。以下、登場順に、前後の文脈も考慮しながら検討していこう。

### 1) 「価値論」における用法

- ① 「資本は、急速に消滅しやすくしばしば再生産されることを要するか、あるいはゆっくりと消費されるものであるかに応じて、流動資本の項目か固定資本の項目に分類される。」(p.31)
- ② 「固定資本は、耐久性がより小さくなるのに比例して流動資本の性質に近づく。製造業者の資本を保存するために、それはより短い時間で消費されその価値が再生産されるだろう。」(p.38)

『原理』「価値論」において、「再生産される reproduced」という語は、第1章第4節と第5節に2ヶ所だけ現れる。<sup>3)</sup> すなわち、第4節「諸商品

3) ②は、初版では②' ようになっており、第2・3版と若干異なっている。さらに初版では、これに続く数値例による説明も第2・3版と異なっており、そのパラグラフに「再生産される」という語が見いだされる(②'')。②と②' を較べてみると、②' では「より短い時間で」が「消費」だけにかかって「再生産」にかからないという違いがあるとはいえ、資本構成の相違による資本の再生産の速やかさの相違を言う点では、両者は同一用法とみなすことができるだろう。

- ②' 「固定資本は、耐久性がより小さくなるのに比例して流動資本の性質に近づく。それはより短い時間で消費され、そして製造業者の資本を保存するためにその価値が再生産されるだろう。」(p.58)
- ②'' 「もし同額の資本、すなわち2万ポンドが、生産的労働を維持するのに使用され、それが貸金を支払うのに使用されるときと同様、年々消費され再生産されるならば、そのばあいには、2万ポンドに10%の等しい利潤を与えるためには、生産される商品は2万2000ポンドで販売されねばならない。」(p.59)

の生産に投下される労働の量はその相対的価値を規制するという原理は、機械やその他の固定的・耐久的資本の使用によってかなり修正される」、および第5節「価値が賃金の上下とともに変動しないという原理は、資本の耐久性が不等であること、および資本がその使用者に回収される速度が不等であることによってもまた修正される」という長いタイトルをもつ二つの節にである。表題が示すように、この二つの節のテーマは、いわゆる“価値修正論”である。すなわち固定資本と流動資本という資本構成の相違は資本の耐久性の相違をもたらし、商品の投下労働価値規定を修正させるという議論が展開されている。

①②における「再生産」という語は、いずれも、資本は耐久性の相違によって「再生産される」速やかさが相違する、というほぼ同じ用法で使用されている。もっとも、①では「資本の消費」に対応する「資本の再現」のように“素材的”な側面にウェイトが置かれ、②では「資本価値の保存」のように“価値的”な側面にウェイトが置かれているというような若干の相違はあるが、ともかくこの二つの用例から、リカードウが「再生産」という語を「資本の再生産」の意味で用いていることが分かる。

## 2) 「地代論」における用法

③ 「『農業で使用される役畜は、製造業の労働者と同様、彼ら自身の消費に等しい価値、すなわち彼らを使用する資本に等しい価値の再生産をその所有者の利潤とともにもたらすだけでなく、はるかに大きな価値のそれ〔再生産〕をもたらす。それらは、農業者の資本とそのすべての利潤をこえて、規則的に地主の地代の再生産をもたらす。この地代は、自然の諸力の生産物とみなされうだろう。…… 製造業で使用されるどんな等しい生産的労働の量もけっしてそれほど大きな再生産をもたらすことはできない。製造業では自然は無為であり、人間がすべてをおこなう。そして再生産は、それをもたらす諸力の強さに常に比例しているにちがいない。』(p.76)<sup>4)</sup>

4) 引用文③はスミスからの引用であるが、その冒頭はスミスでは、「農業で使用される労働者および役畜は、製造業の労働者と同様、…… はるかに大きな価値の再生産をもたらす」となっているが、リカードウの引用では、「農業で使用される役畜は、製造業の労働者と同様、……」と「労働者」が欠落している (cf. WN., pp.344~5)。

④ 『『スミス博士は、地代の再生産が社会にとって非常に大きな利点であることを力説する際に、地代は高価格の結果であり、地主がこの方法で獲得するものは概して社会の犠牲において獲得しているものだ、ということをも反省していない。地代の再生産によっては、社会にとっては何らの絶対的利得も生じない。』』(p.77)

第2章「地代論」に現れる「再生産」という語は、スミスとビュキャナン（註）の引用注の中に2箇所(6語)確認されるだけである。したがってリカード（註）自身の用語ではないのだが、批判的な引用(③)と肯定的な引用(④)を通して、リカードウにおける「再生産」概念はかなり輪郭を浮き立たせてくるように思う。

この二つの引用文で焦点となっているのは、スミスの「地代の再生産」という概念である。周知のようにスミスは、『国富論』第二篇第5章「資本のさまざまな用途について」において、自然の「諸力 agents」に援助された農業では「資本の再生産」だけでなく「地代の再生産」もおこなわれる、と述べた。これに対してリカードウは、ビュキャナンとともに、地代は自然の恩恵の結果でなく、土地の生産性の通減による「高価格の結果」であると考えた。機械の導入が生産性の増大によって産出量の増大と価格の低下をもたらすように、自然力の増大による財貨の豊富は、地代をもたらす価値上昇とは必ずしも直結しないのである。だからスミスの言う「地代の再生産」は、「富」(財貨の豊富)に関しては正しいが、地代の原因となる「価値」に関しては正しくない、とリカードウは言う。「富」と「価値」は区別されねばならず、「再生産」という語は後者についてのみ限定的に用いられねばならない。このようにリカードウの「再生産」概念は、スミスが理論内に取り込んでいた“人間と自然の物質代謝過程”を厳しく排除した上で成立してくる概念と言える。

### 3) 「課税論」における用法

「再生産」という語は、課税論部分(第8～18章)にもっとも頻繁に現

れる。課税論冒頭でリカードは、「租税は、…… 常に究極的には、一国の資本あるいは収入のいずれかから支払われる」(p.150)と述べることによって、租税源泉を収入(地代)のみに求めたスミスと対峙している。リカードは、租税は資本(利潤)によっても負担され、利潤カットもありうることを想定するのである。そのことは、「資本の再生産」の規模の縮小をもたらすだけでなく、商品価格間の比率の変動をも生じさせるだろう。すでに見たように、価格変動は資本の耐久性の相違によって価値規定を修正するからである。もちろん利潤のカットは、収入の資本への転化という主体的要因によっても左右され、そのことが再び価格変動の原因となる。このように租税は、価格転嫁のプロセスを通じて資本蓄積構造に複雑な影響を与えていく。「課税論」部分において「再生産」という語が頻繁に現れる所似である。

⑤ 「私たちはすでに、一国の資本はその耐久性の大小に応じて、固定資本か流動資本のどちらかであることを説明した。…… 一国の食物は、少なくとも年に一度消費されそして再生産される。労働者の衣服は、たぶん2年以内では消費されないし再生産されない。他方、彼の家屋と家具は、10~20年間はもちこたえたと計算されている。」(p.150)

⑥ 「一国のすべての生産物が消費されるものであることは、理解されるに違いない。しかしそれが、他の価値を再生産する者によって消費されるか、再生産しない者によって消費されるかは、想像しがたいほど大きな違いをもたらす。」(p.151)

⑦ 「一国の資本が減少するのに比例して、その生産物は必然的に減少するだろう。それだから、もし人民の側と政府の側で同じ不生産的支出が続き、年々の再生産の不断の減少を伴うならば、人民と国家の資源は加速度をもって衰微し、難況と破滅が続いて起こるだろう。」(p.151)

⑧ 「課税は、どんな形態をとろうとも、害悪の選択を示すにすぎない。もしそれが利潤または他の所得源泉に作用しないのであれば、それは支出に作用するに違いない。そしてもしも負担が平等に担われて再生産を抑圧しないとすれば、それがどちらに課されるかはどちらでもよいのである。」(p.167)

「再生産」という語は、第8章「租税について」の最初の数パラグラフ

にたて続けに現れてくる。⑤では、食物と衣服の消費される期間の長さに関して「再生産」という言葉が使われている。第1章(①②)の固定資本と流動資本という生産資本の耐久性の相違に関わってではなく、消費される財貨の(商品資本としての)耐久性の相違との関連で「再生産」が問題にされている点は注目しておきたい。この少し前のパラグラフでリカードは、「資本は、増加された生産か、あるいは減少された不生産的消費によって増加されうる」(p.150)と、不生産的消費の減少による資本増加について述べている。耐久性の大きな商品資本は、不生産的消費からより多くブロックされる(資本として機能中であれば不生産的に再支出されえない)から、資本の増加に(消極的に)関与することになるといふことだろう。

課税論では「再生産」という概念が、個々の資本や商品のレベルだけでなく、社会的総資本や社会的総生産物のレベルでも用いられている。⑥⑦では、「生産的消費」と「不生産的消費」、「生産的支出」と「不生産的支出」の組み替えによる富と資本の増大が語られている。⑥は、第3版で初めてつけ加えられた注の冒頭部分だが、「他の価値を再生産しない者による消費」は、⑦の「資本の不生産的支出」と同様、年々の「再生産」の不断の減少を通じて「難況と破滅」をもたらすとされている。租税による資本の削減は、資本支出がどう組み替えられるかという、社会的総生産物の分配問題に移し込まれてふり返られているのである。

⑧では、「再生産」は一つの機構として語られている。これは、第9章「原生産物に対する租税」の中の一節であり、「資本の利潤に対する租税は……社会のどの階級もそれを逃げられず、各人はその資力に応じて納税することになるという、他の租税以上の利点をもっている」(p.167)という、いわゆるリカードの“キャピタル・レヴィ”容認論の中に現れる一節である。租税による利潤のカットは、大局的には避けられえないものであるから、とすれば直接利潤に課税することの方が便利だ、とリカードは言っている。とはいえリカードにおいては、価格転嫁プロセスが一定ニュートラルなものとしてとらえられており、課税対象の人為的な選択は

極力回避してそれに委ねるべきとされる。だから、例えばスミスが推奨したような「敷地地代」への特別税には、リカードウは反対する。そのような特定の課税対象だけを狙った人為的な選択は、「所有の安全」という経済社会の根幹原則を脅かすと考えるからである。むしろ、スミスの課税第一原則(「負担の公平」と「再生産」の非抑圧というチェック・ポイントだけを残し、後は(キャピタル・レヴィも含めて)価格転嫁プロセスに委ねておくべしというのが、リカードウの基本的な態度である。

⑨ 「すべての諸商品の市場価格と自然価格の一致は、いつでも、供給を容易に増減させることができるかどうかにかつ依存している。金、家屋および労働のばあいには、他の多くの物のばあいと同様に、若干の事情の下では、この結果は速やかには生み出されえない。しかし、帽子・靴・穀物・服地のような年々消費され再生産される諸商品に関しては事情が異なる。それらは、もし必要であれば縮減されえ、それらを生産する費用の増加に比例して供給が収縮されるまでの間隔が長いことはありえない。」(p.196)

⑩ 「土地の生産物は、年々消費され再生産される。そして他の多くの商品も同様である。それゆえそれらは速やかに需要の水準にもたらされうるから、長くその自然価格を超過することはありえない。」(p.201)

⑪ 「本書の前の部分で、私たちは、固定資本と流動資本への、あるいはむしろ耐久的資本と消滅的資本への資本の分割が、諸商品の価格に及ぼす影響を議論した。私たちは、二人の製造業者が正確に同一額の資本を使用し、そこから正確に同一額の利潤をひき出すとしても、しかし彼らは、彼らが使用する資本が急速に消費され再生産されるか、あるいは緩慢にそうされるかに応じて、彼らの諸商品を非常に異なった貨幣額に対して販売するだろう、ということを示した。……例えば、一方の者の資本は、再生産されるべき2000ポンドの流動資本と建物や機械の8000ポンドの固定資本から構成されているかも知れない。」(p.207)

⑫ 「強制された〔金銀の〕豊富から生じる一国の低い銀価値の不利益の一つ(そして私はそれが唯一の不利益であると考えているのだが)は、スミス博士によって巧みに説明された。もし金銀の貿易が自由であるならば、『海外へ出る金銀は、……等しい価値の何らかの種類の財貨を持ち帰るだろう。……それらの財貨は、……勤勉な人々の雇用と維持のための原料・道具・食料から成っており、彼らはその消費の全価値を利潤とともに再生産するだろう。こうして社会の不活動資本の一部分は活動資本に転化され、以前に雇用されていたよりも大きな分量の勤労を動

き出させるだろう。』(p.229)

ところで、課税による「生産の困難」の増大は「自然価格」を上昇させるが、供給量の減少は「市場価格」を上昇させ、こうして「市場価格」は「自然価格」に再び収斂していく。問題は、供給の調整が迅速におこなわれうるかどうかである。

⑨と⑩は、第13章「金に対する租税」および第14章「家屋に対する租税」に現れた「再生産される」という語である。金・家屋・労働のような商品のばあいとは違って、帽子・靴・穀物・服地のような「年々消費され再生産される諸商品」では供給量の調整が容易であり、市場価格と自然価格の一致プロセスが速やかである(⑨)。また土地の生産物のばあいも、「分量を速やかに縮減されえない」(p.201)家屋や金とは違って、「年々消費され再生産され」、速やかに供給調節されうるから、市場価格が長期にわたって自然価格を上回ることはない(⑩)。このように価格調整のプロセスは課税対象の特性に左右され、そのような偶有性によって価格体系には不均衡がもたらされることになるだろう。リカードウ「課税論」の第9章以下の各論は、租税の価格転嫁プロセスの多様な偏倚を、課税対象ごとに丹念に追うことになる。

⑪は、第15章「利潤に対する租税」に現れる「再生産」という用語である。ここでは、再び、固定資本と流動資本という資本の耐久性との関わりで「再生産」という語が使われている。租税は、⑨⑩で見たように、一様ではないが商品価格の上昇をもたらす。この上昇した価格が、既存の資本の耐久性の相違に応じて、さらに異なる上昇作用を及ぼす。こうして「課税論」の次元で、固定資本と流動資本の区別による差異がもう一度取り込まれて問題にされることになる。

⑫は、第16章「賃金に対する租税」におけるスミスからの引用文中に確認される。リカードウは、課税による商品価格の全般的上昇は貨幣価値下落の結果とはぼ類似している、と主張する。そして、例えばスペインに

おける貨幣輸出の禁止に対して、金銀貿易の自由化によって持ち込まれる諸財貨が勤勉な人々を雇用し、彼らは「原料・道具・食料の全価値を利潤とともに再生産する」から「社会の不活動資本の一部が活動資本に転化される」と言う。「再生産」という言葉は、不生産的消費から生産的消費への転化を言う点で⑥とほぼ同様の用法で用いられていると言えよう。また、外国貿易の文脈で現れているという点は、次の⑬にも通じている。

#### 4) 「論争的諸章」における用法

⑬ 「私たちは、生産されたあらゆる商品のまさに同一量をもっているはずである——原生産物と穀物ははるかに安い価格で売られるだろうが。一国の資本はその諸商品から成るのであり、これらは以前と同一であろうから、再生産は同一の比率で進行するだろう。」(p.270)

⑭ 「一国の富は二つの方法で増加される。すなわち、収入のより大きな部分を生産的労働の維持に使用することによって、……あるいは追加的労働量の使用なしに同一量の労働をより生産的にすることによって。…… / 第一のばあいには、…… 一国は節儉によって富んでくるだろう。すなわち奢侈と享楽の対象物へのその支出を減らし、その貯蓄を再生産に使用することによって。」(p.278)

⑮ 「第二のばあいには、…… 富は増加するが、しかし価値は増加しないであろう。富を増加するこの二つの様式のうち、後者〔第二のばあい〕が選ばれねばならない。というのは、それは、第一の様式に伴わざるをえない享楽品の欠乏や減少なしに、同じ結果を生むからである。資本は、…… 富と同じ方法で増加される。追加的資本は、熟練と機械の改善から獲得されようが、より多くの収入を再生産的に用いることから獲得されようが、将来の富の生産において等しく有効だろう。」(pp.278~9)

⑯ 「機械を使用する結果として、服地製造業者にとって必要なのは、消費された価値に全資本に対する利潤を加えたものに等しい価値を再生産することだけである。」(p.391)

⑰ 「マルサス氏は言う。『製造業で使用される生産的労働のどの等しい分量も、農業におけるほど大きな再生産をひき起こすことはできない、ということがアダム・スミスによって正当に述べられた』、と。もしもアダム・スミスが価値について述べているのであれば、彼は正しい。しかし、これが重要な点であるが、もし富について述べているのであれば、

彼は誤っている。というのは彼自身は、富を、人間生活の必需品・便益品・享楽品から成るものと定義したからである。」(p.429)

『原理』の「論争的諸章」部分(第19～32章)において、「再生産」という語は、第19章「貿易路における突然の変化について」、第20章「価値と富、それらの区別的特性」、第31章「機械について」、および第32章「地代についてのマルサス氏の意見」の4つの章に現れている。第24章「土地の地代に関するアダム・スミスの教義」には確認できないとはいえ、これらがいずれも「論争的諸章」部分でもっとも注目を集めてきた諸章であることは興味深い。

⑬に見るように、第19章「貿易路における突然の変化について」でリカードウは、「再生産の比率の進行」を語っており、つまりここでも「再生産」を一つの機構的なものとしてとらえている。この章の主題は、戦時から平時への転換が農業に与える難況の評価である。そこでリカードウは、施肥・柵・排水のような固定資本の投下や借地期間のために、確かに農業の難況は長引き深刻化する傾向があるとはいえ、本質的には他の産業と変わらないことを主張している。「再生産」という語が使用されている一節では、平時への転換による安価な外国産穀物の圧力が国内穀価を低下させ(劣等地の農業者には損害が発生する)、しかしひき続き国内での土地生産が続行される(外国産穀物は輸入されない)ばあいについて述べられている。このばあい、「再生産は同一の比率で進行するだろう」とリカードウは言うのである。輸入は生じず、国内で以前と同一の生産物が生産され、したがって(穀価低下による、地代低下と利潤上昇という諸収入間での移転はあるが)一国の資本は同一の諸商品から構成されると考えられるからである。

もし穀価がさらに低下し、国内の劣等地が駆逐され外国産穀物が輸入されるならば「再生産」の構造が変わると、リカードウは言外で言いたいのだろう。このばあい、やはり地代低下と利潤上昇が生じるとはいえ、劣等

地から駆逐された資本が他部に流出し生産物構成が変わってしまうだろう。先に「再生産」の構造は、収入の資本への転化によって規定されると述べられたが、ここでは(収入と資本に関わりなく)年生産物の素材的構成そのものによっても規定されることが示唆されている。とはいえリカードウは、この論点を十分に展開してはいない。

⑭⑮は、第20章「価値と富、それらの区別的特性」における「再生産」の用語法である。⑮では、「再生産的に reproductively」という語が使われている。この二つの連続した引用文でリカードウは、一国の富を増加させる二つの方法について語っている。すなわち、1) 収入の資本への転化と、2) 労働生産性の改善、である。商品量を増加させるが商品価値を増加させない後者がベターであるとリカードウは言うが、「再生産」という語は、貯蓄の再生産への使用(⑭)、収入の再生産的な充用(⑮)というように、前者に限定して用いられている。ここでも、人間と自然の物質代謝が立ち上げてくるスミスの本源的な生産性に関しては、「再生産」という語の使用は慎重に避けられている。<sup>5)</sup>

⑯は、第31章「機械について」中の一節であるが、機械の使用による労働需要の減少は総生産物の減少を伴いうるという文脈の中で「再生産」という

---

5) 初版および第二版では、この一節に続けて、セーの富と価値の区別の不十分さを批判したパラグラフが続き、その中で「再生産する」という言葉を含むセーの一節が引用されている(⑮')。セーはそこで、人間のなしうることは「物体 objects」そのものの創造ではなく形態転換、つまり「せいぜい物質 matter を他の形態 form に再生産することくらいである」と言っている。この引用を読むかぎり、セーは価値(人間)の外側にある富(自然)の領域の存在を指示し、富と価値の区別を意識しているかに見える。しかし他方でセーは、「富が構成される価値の総額が大きいときに富は大きい」(p.279)などと両者の変動の同方向性を述べたりもしており、結局は両領域の区別に十分自覚的であるとは言えない、とリカードウは批判する。「再生産」という言葉を「価値」に限定して使ったセーの、そのかぎりでは評価できるこの引用文が、第3版で削除された背景には、このような事情があると考えられる。

⑮' 「私たちは物体を創造しない。私たちがなしうるのは、せいぜい物質を他の形態に再生産することくらいである。つまり私たちにできることは、物質に効用を与えることくらいである。」(p.280)

概念が用いられている。例えば、機械の導入によって服地製造業者はより少量の労働で服地を生産できるようになるが、そのことは労働需要を減少させ労働者用の服地の生産を減少させるかも知れない。なぜならば服地製造業者にとっては、生産費(充用資本価値+利潤)が回収＝「再生産」されさえすればよいからである。ここでも「再生産」という言葉は、「資本価値の再生産」という意味に限定されて使われていて、機械の導入というような労働生産性に属する領域では決して使われていない。

⑪は、『原理』最終章である第32章「地代についてのマルサス氏の意見」の最終パラグラフである。例の、農業の多産性を述べたスミスを肯定的に引用するマルサスが、批判的に再引用されている。第2章と同様に(③④)、「富」と「価値」を区別しないスミスが批判される。リカードウにとって「再生産」概念は、「富」の領域ではなく「価値」の領域に限定して使用されるべきものと考えられたのである。

### (三)

以上、『原理』の中の「再生産」というタームを前後の文脈も考慮しながら概観してきた。①～⑪を通読してみると、リカードウの「再生産」概念の輪郭がおぼろげにながら見えてくる。

まず第一に、リカードウは「再生産」という語を「資本の再生産」という意味に限定して使用している。固定資本と流動資本の構成割合による資本の「再生産」の速やかさの相違(①②⑤)、「年々消費され再生産される」商品とそうでない商品の価格調整プロセスの相違(⑨⑩)、資本構成の相違が価格修正に及ぼす影響(⑪)、等々である。

第二に、リカードウの「再生産」概念はスミス「再生産」概念の批判である。スミスが評価する大地の自然的諸力について、リカードウは「富」の増大には関与するが「価値」の増大には関与しないとして「再生産」概念からこれを排除する。「富」と「価値」の区別に自覚的でなく「地代の再生産」を語っているスミスからの批判的引用(③)、これに対するビュキヤナンからの肯定的な引用(④)、そしてスミスに追随するマルサスからの否定的な引用(⑪)、これらはリカードウの「再生産」概念が何でないかを

浮かび上がらせる。

第三に、リカードウは「再生産」というタームを、個別的な資本のレベルだけでなく、一国の資本蓄積総体のレベルでも使用している。不生産的支出による「再生産」の減少と節儉による富の増大が説かれ(⑥⑦⑫⑭⑮)、課税や外国貿易や機械導入による「再生産」の内的構造への影響が論じられている(⑧⑬⑯)。

全体を通して、リカードウは「再生産」概念を、資本価値を反復・継続して再現させてくる価格機構に即して用いていると言ってよいだろう。「価格」とは、資本と収入(地代・利潤・賃金)の一定割合によって構成される所有名義争奪的な領域であるが、リカードウは『原理』の随所で、一方で改良・機械のような労働生産性の変動要因を、他方で課税や外国貿易のような制度的な変動要因を、言わば外側から“価格の領域”に接触させ、この名目的な領域がどう組み替えられていくかを追求している。「再生産」概念が、まさにこの課税論・外国貿易論・機械論に集中的に現れていることは、『原理』全体の課題との関連でどう考えたらよいのだろうか。これについては、別稿で検討したい。